

# 京大現代文頻出テーマ「言語と文章」のレジュメ

作成者 中野 芳樹

京大では、過去三十年以上にわたり、言語、美術・芸術、文学、哲学・思想、歴史、文化・民俗など、**人文学分野からの出題が基本**であり、政治経済分野（社会科学）や自然科学分野からの出題は、ほぼ皆無と言ってよい。主に、

- ① 言語 話し言葉と書き言葉、日常語と文学、翻訳、言語と思考……
- ② 文章 実用と文学、散文（小説や論文）と韻文（詩歌）、現代と古典……
- ③ 書物 読むことと書くこと、読書と人生、書籍……
- ④ 芸術・美術 リアリズム（とアイディアリズム）、創造、虚構、想像、美……
- ⑤ 人間論・人生論 生、老、病、死、現実と人生（体験）、自然と人生……

を巡る内容の文章が繰り返し出題されている。これらは趣味的な文章などではなく、人文学の深い学識のある出題者によるものであり、現代文の学力の一要素として、京大国語はある程度の人文学的素養を前提としていると考えられる。しばしば表面的には軽いタッチの随想が出題され、しかもそこに深い思索に基づく学術的知見の含蓄を掬い取る**正確厳密な読解**と、**簡潔かつ確かな記述表現力**が求められている。

以下は、京都大学の本試験出題内容に鑑み、（通常授業や講習においても解説は行っているが）ある程度出題内容のパターン分類を試みたレジュメである。

## [1] 言語・言葉に関する様々な議論の概要

A そもそも「言語」とは何か

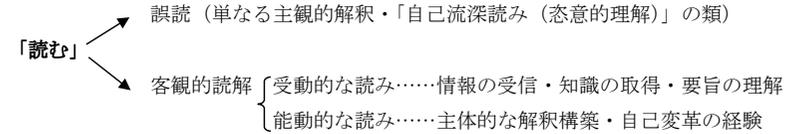
- ① いまだ言葉にならない精神のあり方＝前言語的状態
  - ・無意識、image の段階 → 夢・美術・音楽等、言葉以外の形象による「表現」  
↓
- ② 言葉になる段階＝認識・判断・思考における言語
  - ・意識、世界を自然言語で分節・差異化して認識する（概念化・抽象的な分類）  
\*言葉・記号による世界の分節・認識・概念化は、文化的差異と相関する

B 話し言葉と書き言葉との違い

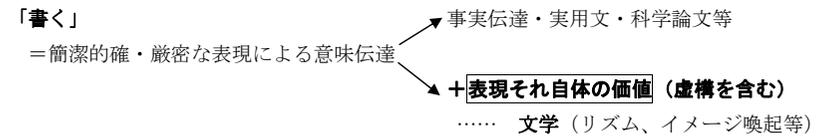
- ① 話し言葉・口語 spoken（ヒトの言語の始まり、日常的表現）  
…… 語用・対話の現場（特定の相手と向き合っでの言語使用）  
即興・粗削り、未完成、リアルタイム

- ② 書き言葉・文語 written（文化・歴史・文明の始まり、日常的表現と文学的表現）  
…… 読者（不特定多数、広域、匿名性）、推敲・洗練、完成、オンデマンド  
\*言語の歴史の変容（文法・語義・用法等） 社会変動と言語変容の相関

## [2] 「読む」ことと「書く」こと、日常的表現と文学的表現について

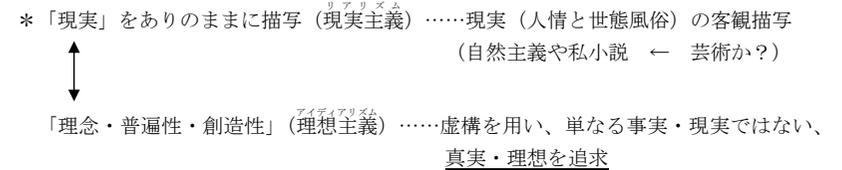


\*現代文の「正（しい）解（釈）」とは、上記「受動的な読み」を指す。もし各人各様でありながら「優れた解釈」があるとするれば、それは上記「能動的な読み」のみである。後者は、前者を前提として、その先へと進むことである。単なる誤訳を「意識」と強弁できないように、少なくとも学問の領域では、客観的な読みをさしおいて主体的な読みなどありえない。



\*「デフォルメ」とは、正しいデッサンができる画家があえて変形することを言う。

## [3] 文学・芸術の理念的対立（リアリズムを巡る諸問題）



\*リアリズムは、「虚構」を非現実、嘘・誤りとみなし、「ありのままを客観的に表現せよ」という。他方、アイディアリズムの立場は、単なる想像やフィクションの礼賛ではなく、具体的、表層的な「現実」や「事実」ではなく、それらの真相としての「真実」を「理想」として描こうとする。「自然よりも自然的な、現実よりも現実的な虚構」の追求である。